

生涯学習における多読に公立図書館は どのように貢献できるか

良 知 恵美子

How Can Public Libraries Contribute to Extensive Reading
as Lifelong Learning

Emiko RACHI

2015 年 11 月 19 日受理

抄 録

Extensive reading (henceforth ER) has been practiced at many educational institutes and is gaining popularity as an effective English learning method. Because of its flexibility, ER can be adopted by various learners regardless of their age, occupation, language learning experience, and proficiency. Even those who have long since graduated from high school and university can restart learning English through ER without any hesitation. In order to promote ER as a tool for lifelong learning, the role of public libraries should be considered. It is necessary to provide ER practitioners with appropriate information and enough books through public libraries in each community. This paper reports how some public libraries in Shizuoka Prefecture have started introducing ER services and how they should continue to support ER for lifelong learning.

キーワード：多読，公立図書館，生涯学習，多読コーナー，読書相談会

1. はじめに

多読は酒井（2002）において「100 万語多読」として提案されて以来、現在多くの教育機関において実践されている。筆者の勤務する常葉大学においても 2011 年度に外国語学部英米語学科の全 1 年生に導入を始めてから、2015 年度で 5 年目を迎える。導入当初は 10 人程度の学生を中心とした多読サークル形式での出発であったが、その後、英米語学科 1 年生の授業内に Sustained Silent Reading(以下 SSR)を取り入れ、外国語学習支援センター（Foreign Language Student Support Center：以下 FLSSC）を核とした授業外多読を併せて推奨してきた。100 万語読了者が少しずつ増え、現在は毎年 10%程度の学生が 1 年間 100 万語の目標に到達できている。2 年目 3 年目へと継続できる学習者も増加し、複数年継続することによってその成果を実感

できるなど、「常葉多読文化」が定着してきている。一方、学校以外で行われる多読も少しずつ社会に普及し始めている。既に大学や高校を卒業した一般社会人が、再び英語に触れる一つの窓口として、多読は有効な選択肢の一つであると筆者は考えている。生涯学習における多読が公立図書館を窓口としていることは言うまでもないが、教育現場で実践されている多読が、授業外多読を積極的に推し進めていくためにも、その果たす役割は大きいと考える。そこで、本稿では先ず公立図書館が多読の現場においてどのように貢献できるのかを考察する。そして、静岡県内の公立図書館で行われている多読の現状を紹介し、特に筆者が選書に携わった静岡北部図書館の多読事情について報告したい。

2. 公共図書館の役割

多読はここ 10 年のうちに急激に普及したと言ってい。筆者が個人的に多読を始めてから 8 年近くになるが、一向にその魅力は衰えない。読みたい本は次から次へと出版され、空き時間や隙間時間を有効に活用できる多読は、既に筆者の生涯の友となっている。文部科学省においても、平成 25 年 12 月 13 日に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が公表され、「新たな英語教育の目標・内容（案）」の中で、「言語活動の内容（聞き取り、多読、速読、作文、発表、討論等）や量を増加」とし、「多読」という文言が採用された。公教育において、多読が有効な一つの学習方法として認知され始めたことを示している。

多読がこれほどまでに短期間に日本の英語教育に受け入れられたのは、「多読のとっつきやすさ」であると酒井・西澤（2014）は述べている。多読はどんな年齢の人でも始められるし、どんなレベルの学習者でも受け入れてしまう懐の広さを持った学習方法である。一般社会人の多読、小・中・高・大学の教室で授業として行われる多読、それぞれに取り組み方や目標の設定は異なるが、一旦多読の楽しみを知ってしまうと、なかなかそこから抜け出すのは困難なほど、多読の魅力は奥深い。今後多様な多読スタイルが生み出されることが期待され、その際公立図書館が重要な役割を担うことは間違いない。そこで、本稿では、公立図書館が、教育機関と生涯学習の多読それぞれの領域において、どのような位置づけができるのか、またどの様に両者を結びつける繋ぎ役となり得るのか、その可能性について述べることにしたい。

2.1. 教育機関での多読

現在筆者が多読を実践している場は大学である。大学における多読は、中高等学校までに翻訳式の読みにすっかり慣れきっている学習者が、多読を通して流暢な読みを体験できるきっかけを作る場でもある。日本では、「日本人学習者は読めるが、話せない」と多くの人々が思い込んでいるが、これは大きな誤解である。正直に言えば、「読めないし、話せない」が真実である。種村（2014）は、「英語学習者が、授業で精読しか経験しなければ、英語の読解は、英語を訳すことであり、語彙や文法事項などを常に勉強することであるという認識を植え付けてしまう恐れがある」と指摘している。

流暢な読みの能力を習得するには、一にも二にも英語を多量にインプットし続けることである。日本において多くの英語学習者が流暢に読めていないという事実は明らかであり、インプットが不足しているということである。これを解決する方策として多読は最適な学習方法である。ただ、授業内で確保できる SSR のための時間は限られている。学内図書館を活用した授業外多読はもちろんであるが、長期休暇中にどのようにして多読を継続させるかという問題が浮上する。筆者の勤務する常葉大学の FLSSC は、多読本を貸し出し、学習カウンセリングを行う場であるが、長期休暇中は閉館している。学内図書館はこの期間でも開館しているが、遠距離通学している学生も多くおり、通学運賃を考えると大学まで多読本を借りるためだけに足を運ぶことは期待しにくい。ここに公立図書館と大学多読を結びつける接点があると考えられる。公立図書館ならば学生の居住区域にあり、気軽に足を運ぶことができる。費用も掛からない。ただ、現時点では地域の公立図書館で多読本を配架しているところはまだまだ少ない。後述するが、静岡県内では、富士宮図書館、静岡北部図書館、浜松中央図書館のまだ3か所に過ぎない。今後公立図書館への多読導入の動きが活発になってくれば、学生や生徒が多読を継続し易い環境が整い、また個人的にも多読を始められる素地が整備されていくであろう。

2.2 生涯学習における多読

2.2.1 多読本の貸し出しとしての場

生涯学習として個人的に多読を始める場合には、まず多読本をどのように確保するかにある。易しい絵本から始めて多量の本を読む必要があるのは、多読を進めるうえでの基本中の基本であるが、その多量の本を自前で購入することは不可能である。10ページほどの薄い本とはいえ洋書であり、それでも1冊700円から800円ほどはするのが実情である。多読初心者がまず最初に手に取る Oxford Reading Tree（以下 ORT）なら、Stage 1+ ～ Stage 9 までで 180 タイトルもある。多読を長期間継続することを考えると、どうしても無料で本を準備しなければならない。勿論公立図書館なら無料ですべての本を借りることができるし、自宅から近距離に位置しているため、気軽に利用することが可能である。また、多読を継続する motivation を維持するためには、次々と出版される新刊本の情報が欠かせない。もし計画的に多読の蔵書を増やそうとしている図書館なら、この種の情報は適切な時期に利用者に向けて発信されるであろう。

2.2.2 多読仲間をつなぐ場

個人的な興味と趣味で始めた多読は、教員から「今週は～語読みなさい」と言われて焦ることもなく、読むか読まないかの判断は全て自分に委ねられている。気ままに進められればそのまま楽しんで多読が継続できそうであるが、現実それほど甘くない。授業内で多読を行っていれば、指導者が選書のアドバイスはするし、語数が進まない時でも友人同士で問題を共有し解決を図ることができる。一方個人で多読に取り

組んでいる場合、順調に進んでいる時も、多読の楽しさを仲間と共有することもできず、問題を抱えているときも相談する相手もない。しかし、公立図書館が個々の多読実践者が集い情報を共有する場として機能すれば、この問題はおそらく解決できるであろう。

多読を日本の英語教育現場へ導入するきっかけを作った現 NPO 多言語多読理事長 酒井邦秀氏や、この動きを受けいち早く高等専門学校へ多読を導入する決断をした豊田工業高等専門学校の西澤一氏は、公立図書館が多読の集いの場となるための活動を勢力的に行い、公立図書館多読が地に根付いた活動となるよう尽力されている。両氏は、公立図書館での講演会開催の後にも、読書相談会として選書相談に乗るなど手厚い支援を行っている。

公立図書館の中でも、愛知県知多市立中央図書館は公立図書館として多読資料が最も充実した図書館として知られている。豊富な多読図書に加え、それを利用者に提供する側としての司書が多読についての情報を積極的に収集しそれに熟知している。また、年数回は多読講演会を開催し多読継続のために環境を維持することに力を注いでいる。(酒井・西澤：2014) 実際に多読本を手にとって触れ読むことを体験する会を企画しながら、多読を講演会参加者に紹介した後も、継続を支援する機会を設け、公立図書館が地域多読の核となる機会を提供している。

多読仲間をつないでいくことはただ図書館がそこに存在するだけでは意味がない。そこに多読指導者が関わり、参加者に多読のもつ楽しさそしてより良い効果を生むための方策など、人的支援は不可欠である。

3. 公立図書館での多読実践

公立図書館の協力を受け、多読は生涯学習としての可能性を大きく発展しつつある。現在静岡県内では、富士宮市立図書館、浜松中央図書館、静岡北部図書館の3箇所が多読コーナーが設けられている。本稿では、筆者が多読講座に参加した浜松中央図書館、多読新規導入に際し選書に携わった静岡北部図書館の「多読環境のいま」について報告する。

3.1 浜松中央図書館

浜松中央図書館は、豊田工業高等専門学校の西澤氏がその導入に深く関わっている。多読図書が導入されたのは今年（平成 27 年）に入ってからであり、平成 27 年 11 月 14 日に西澤氏による英語多読講座が開催され、筆者もこれに参加した。会場の参加者（40 名）からは、多読への思いがひしひしと伝わってきた。既に多読セミナー等に参加し数年継続している参加者もおられた。また、多読サークルなどを浜松市内で定期的に企画している方、また今回の講座を踏まえて多読を始めようとする方々も数多く参加しておられた。西澤氏は、既にこれまで愛知県を中心として岐阜県、三重県、岡山県等で多読初心者向けの講座を度々開催し、生涯学習としての多読を始めるには何が鍵となるのかを熟知しておられる。会場からの質問にも丁寧に対応され、日本語

を介さずに英文を読めるようになる回路を脳内に作ることが多読の肝であり、即効性を期待せずゆったりと構えつつ多読を楽しむコツを伝授されていた。



図1 浜松中央図書館多読コーナー

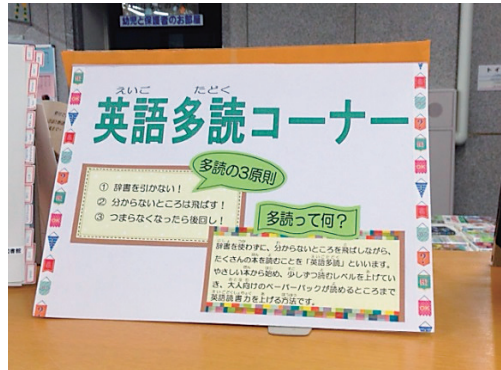


図2 多読3原則の紹介



図3 多読記録手帳案内

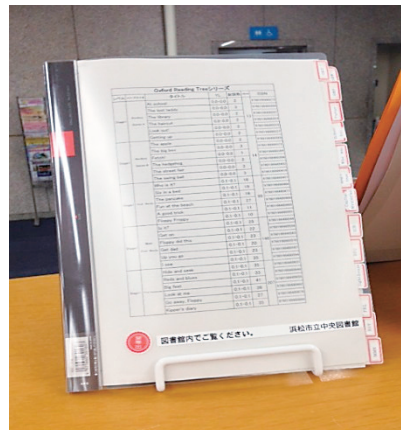


図4 多読図書リスト

浜松中央図書館の多読コーナー（図1）には、多読を進める上での基本となる「多読3原則」（図2）、多読学習の過程を可視化できる多読記録手帳（図3）、多読図書リスト（図4）などの案内が提示されていた。多読記録手帳は簡略版を無料配布しており、多読図書リストは浜松中央図書館のホームページでも閲覧することが出来る。

3.2 静岡北部図書館

静岡市立図書館では、御幸町図書館と北部図書館に多読図書が配架されている。前者は学習者向け Graded Readers を中心とした多読図書サービスを行っているが、やさしい読み易いものから始める多読の原則に従うと、多読初心者に必要な書籍は十分準備されていないのが現状である。一方、後者の北部図書館は平成26年10月に筆者に北部図書館長より選書の依頼があり、多読コーナー（図5）の開設準備に入った。



図5 北部図書館多読コーナー

初心者向けの図書としてORT、Graded Readers、Leveled Readers、それに加えてCurious George シリーズ、Mr. Putter & Tubby シリーズ、Magic Tree House シリーズ、Mercy Watson シリーズ、Nate the Grate シリーズといった母語話者向けの人気シリーズも取り入れ1,200冊が整った。平成27年8月には西澤氏による英語多読講演会が既に開催されており、多読3原則の説明(図6)や多読の成功談(図7)などがコーナーを初めて訪れた来館者の注意を引き易い場所に置かれている。今後利用頻度を見ながら多読図書を是非追加していって欲しいと考えている。筆者は選書のお手伝いをさせていただいた経緯があるため、これからも継続的に北部図書館の支援を行っていく予定である。

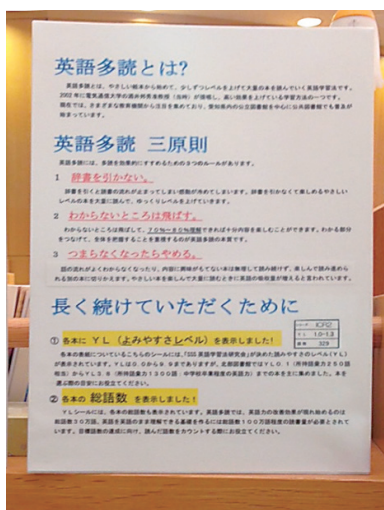


図6 多読3原則等説明



図7 多読成功談紹介

4. むすび

公立図書館との連携はまだ始まったばかりであり、今後多読指導者達はその運営に積極的に関与していくことが求められる。多読の効果を引き出すためには何にも増して「継続」することが必要であり、それは生涯学習の場でも変わらない。多読の魅力を多くの人々に理解してもらうためには、公立図書館と多読参加者を繋ぐ役割をするものが是非とも必要となるだろう。筆者はその役割を、多読を実践する大学が担えるのではないかと考えている。筆者の勤務する常葉大学では、多読を実践して5年が経過したところであるが、できるだけ多くの100万語読了者を排出することを目標に掲げてきた。現在2年以上継続できる素地がようやく整い始めたところであるが、学習者達からは多読の効果を前向きに捉える声があちこちから生まれている。英語検定やTOEICの得点上昇など、外部指標から自分の英語力の向上を実感する者もいるし、純粋に英語による読書にその楽しさを見出した学習者もいる。高等学校までの英語学習で顕著な成績を出せなかった者でも、自分なりのペースを作って着実に学習を進めている。既に指導者よりも多読本の情報に精通しており、多読の基本を心得て、多読仲間に適切な助言が可能な学習者も多数いる。そこで、今筆者は、彼らを公立図書館と地域の多読実践者を繋ぐ役割として是非とも期待したいと考えている。生涯学習として多読を始めた一般社会人と大学生が多読を通じて語り合うことは、多読発展への貢献となるだけでなく、学生自身にも社会と連携し、自ら学んだことを社会へと還元する道筋を作ることにもつながっていくはずである。多読は、どんな人にも寄り添える柔軟性を持っており、是非その特性を活用しながら、地域と大学が連携し、多くの人々に英語多読の楽しさを伝える活動を継続していきたい。

参考文献

- 良知、柴田 (2016). 大学英語多読教育における False Beginners への個別支援のあり方『日本多読学会紀要』発行予定
- 酒井邦秀 (2002). 『解読 100 万語！ペーパーバックへの道』東京：ちくま文庫.
- 酒井、西澤 (2014). 『図書館多読への招待』東京：日本図書館協会
- 種村俊介 (2014). 「英語学習者の多読行動を規定する構成要素の内部構造の記述と多読行動モデル構築の試み」名古屋大学大学院国際開発研究科博士論文、<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jsui/handle/2237/21227> (2015 年 9 月 5 日アクセス)
- 浜松中央図書館 HP <http://www.lib-city-hamamatsu.jp/access/chuo.htm> (2015 年 11 月 19 日アクセス)
- 文部科学省 (2013) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm (2015 年 11 月 19 日アクセス)
- 静岡中央図書館 HP http://www.toshokan.city.shizuoka.jp/?page_id=13 (2015 年 11 月 19 日アクセス)

